ミシェル城館の人

自然　理性　運命

堀田

ミシェル城館の人

自然 理性 運命

堀田善衛
Yoshie Hotta

苏工业学院图书馆
藏书章

集英社

ミシェル 城館の人 ＊＊自然 理性 運命

一九九二年 四 月二五日 第一刷発行

著 者 堀田善衛

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一―五〇
電話 編集部 (〇三) 三二三〇―六一〇〇
販売部 (〇三) 三二三〇―六三九三
制作課 (〇三) 三二三〇―六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1992 Y.HOTTA, Printed in Japan ISBN4-08-772843-9 C0093

ミシェル 城館の人

♧♧

自然 理性 運命

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

ミシェルは一五七〇年の七月に、それまで十三年間つとめた、ボルドオ高等法院審議官の職を友人に譲り、七〇年の暮れ頃か七一年のはじめに、亡父から相続をした領地の、モンターニュ、すなわちモンテーニュの城館に帰った。

まことに、そしてたしかに、帰りなん、いざ、という次第ではあった。

けれども、十六世紀フランスでの、田舎の城館生活の現実というものは、二十世紀の世紀末に生きているわれわれには、実に想像を絶するものであった。

第一に、現在のわれわれの生活の快適性と居住設備、あるいは生活の利便のための機器を、全部取り払った生活を、果して誰が想像出来るであろうか。スイッチ一つでついたり消えたりする照明、それに季節と無関係な室温調節、指で軽くひねるだけでいくらでも出て来る水、ましてや熱湯までが出て来る生活が生活というものであるとしたら、そしてもし十六世紀の人間がこれを見るとしたら、二十世紀のこの生活は、生活というものではない、と言うかもしれないであろう。ひょっとして、それは生活の快適性と居住設備のための機器、あるいはその利便性の奴隷になっているのであって、生活そのものではない、と言うかもしれない。ましてや、われわれの持って

いる交通機関などは、悪夢の白昼横行、のようにさえ見えるであろう。
とにかく、現代人であるわれわれが持っている家、あるいは居住設備についての、あらゆる概念を一度意識のなかから追放してしまわなければならない。
それに、城館と言うと、人々はロアール川沿いの田園に散在している、宏壮にして美麗かつ瀟洒な、王室と大貴族たちの離宮を思い浮べるかもしれなかったが、あれらの城館は、まったく例外的なものなのであった。
一般の貴族たちは、要するに領主であり地主であって、その仕事は農産物の収集であり、その交易であった。従って、城館といっても、彼等のそれは豪勢でもなければ、美麗とか瀟洒などということとはまるで縁のないものであった。
また、帰りなん、いざ、などと筆者は書いたものの、当時の貴族たちは、実のところすべて田園に住んでいたのであった。廻船問屋の家系に属するミシェルのように、ボルドオに大した館をもっていた貴族は、これまた例外なのであった。宮廷に出仕していた、あるいは呼び出されていた貴族たちといえども、〝四分の一年〟という慣習にもとづいて、年に三カ月しか出仕していなかった。田園が彼等に与えてくれる収入では、到底、宮廷での出費をまかなえなかったからであった。高価な衣裳や、馬匹、召使、宴会等の催し物などには、莫大な費用がかかり、例えばパリに滞在しているときなどは、大抵は部屋やフラットを賃借していたものであった。
さてその田園の城館であるが、これもまた今日の目で、あるいは観光客の目で見たりしてはならないのであった。たしかに、漆喰で石組みをかためた塀、あるいは城壁のなかに、広い土地をもち、かつ宏壮な城館が建てられていて、その正面に石の大きな紋章などが飾られてい、方々に

大理石の彫刻が立っていたりしていたとしても、それらのものに目をくらまされてはまずいのである。

高い塔がそびえ立っていたとしても、その内側は穀類や乾草の倉である。ミシェルの城館の場合にも、正面入口の前に、母屋とは切り離された三階建ての塔が建っていた。これがこのあと、ミシェルの書斎となるのであったが、ミシェルが帰って来る前には、何に使われていたものか、誰も言及はしていないところをみると、おそらくがらんどうのまま放置されていたものであろう。この塔をまわるような形で、中門――城壁の入口が第一の門、となる――があり、そこを過ぎると、広々とした中庭にでる。館はこの中庭を囲んで、四方に、いわば散在するという形をとっているのであった。

〈私は家にいるとき、かなり頻繁に書斎に身を避ける。そこから容易に家事を監督する。入口（中門）の上にいるから、すぐ下に（玄関脇の）庭園と、家畜小屋と中庭と、わが家のほとんどの建物が見おろせる。私はそこで時にはある書物を、時には別の書物を順序も目的もなくぱらぱらとめくる。またある時には夢想をし、またある時には歩きまわりながら、ここにあるようなとりとめもない夢を書きつづる。〉

これを読むだけでは、あるいはこれだけを額面通り受け取るとすれば、それは優雅な貴族的文人の生活と思われるであろう。

けれども、実状はそんなものではなかった。たとえば中庭の奥の家族の居住する建物は、調理

場を中心として、四つ乃至五つの部屋があったのであったが、部屋と部屋を仕切る、ドアーというものがまだ考えられていなかった頃としては、すべての部屋は、巨大かつ単調、方形に仕切られていて、前後は壁であり、窓は左右の側面壁にしかなかった。それに、冬期の寒さを勘定に入れれば、窓はなるべく少い方がよかった。

こういう建物としては、もし人が一つの階の端から端へ移ろうとすれば、全部の部屋を一つ一つ突っ切って行くより他に法がないということになる。その一つ一つの部屋で家族の誰かが、あるいは複数の召使たちの誰彼が何かをしていたとしても、とにかく彼、あるいは彼女のそばを通り抜けなければならない。たとえ彼と彼女が性交をしていても、その傍を通り抜けて行かなければならない。

ところで冬期の寒さのことにいま言い及んだばかりであるが、人々が寒さに震え上っていたことにかけては、古代も中世期もルネサンス期も何の変りもなかった。

今日、観光旅行で城館(シャトウ)を見物に行く観光客たちは、大抵広くがらんとした方形の部屋の、その壁の一面の全体を占めるほどの巨大な調理用の暖炉、マントルピースを眺めて、豪勢なものだ、と感嘆をする。けれども、このマントルピースなるものも、それほどに暖くもありがたくもない代物であった。火から少し離れれば、もう空気は凍てつかんばかりで、従って人々は一日中、室内でも毛皮つきの部屋着を着たきりであり、男女とも頭には頭巾をかぶっていた。

その上、すべてのマントルピースがうまく、吸い込みがよくて具合よく燃えてくれるとは限らないのである。けぶってばかりいて、部屋を煤(すす)で真黒にし、あげくは煙突から突風でもが吹き込めば、火の粉だらけになる。ルネサンスの画家のラファエロが、最初に法王からの呼び出しを受

けたのは、画業のためではなくて、暖炉の修復の仕事であった。
それに薪は燃えてしまえば灰になり、少くとも三十分おきか一時間おきに、薪運びの召使が負籠一杯をかついで出入りする。
十九世紀半ば以前の、セントラル・ヒーティングなるもののなかった時代のヨーロッパ人は、常に寒さに悩んでいた人間たちであった。家のなかにいても寒かったのである。床には保温用の麦藁が敷きつめてあった。一世紀も後のルイ十四世でさえも、ヴェルサイユの宮殿で、葡萄酒の凍ったカタマリを嚙じらねばならなかった。
従って貴族も庶民も、目覚めている時間の大部分は、大きな調理用のマントルピースのある部屋、つまりは台所で過すことになる。この当時の城館にしても、庶民の家にしても、そこに食堂というものがなかった。台所に置かれた、調理用でもある大きな、長方形のテーブルで食事をした。領主とその妻が火に近いところに腰をおろし、子供たちやお客はベンチに並ぶ。そうして、テーブルの下には、犬や鶏や家鴨までがおこぼれを待ち構えてい、狩猟用の鷹は、窓際のとまりで睨みをきかせていた。
要するにこの台所がすべてであったのである。領主の家族の食事が終れば、次には泥や埃まみれの作男たちや女たちがどっとつめかけて来るであろう。領主以下、その人数は二十人を下ることはまずなかったであろう。それはもう、現代の生活というものと比べたら、大混乱、大混雑そのものであり、これに住み馴れた動物たちまでが加わっていたとしたら……。
結局、彼等は本質的に戸外の人々であったのである。家の中にいるのは、食事のためと、雨降りの日だけであった。生活は畑や、葡萄畑、牧場にあったのであり、領主は狩をしながら領地を

見廻ったり、市が開かれればそこへ出掛けて行く、といったところにあった。かくて、市の開かれている場所で、哲学や詩や、思想について談じたりすれば、莫迦あつかいされて当然であったであろう。

最悪なのは夜であった。何分にも照明といえば、どの部屋でも結局は暖炉の火、ということになる。ランプはないではなかったけれども、灯油や灯心が精製出来なかったために、黒い煙を上げてたまらない悪臭を放った。

それでも彼等は、晴天の日にも二時間でも三時間でも、この広い調理場につめかけていた。

「十六世紀の人間は、どちゃどちゃ集ることが大好きなのだ。農民がすべてそうであるように、彼等は孤独を嫌忌する。十六世紀はわれわれのような羞恥心を持っていないし、一人になりたいという現代人の欲求をまったく知らない。(中略)各自に個室を、などというのはつい近頃の考え方であって、われわれの祖先だとしたら、何のために、と逆に問いかえして来たことであろう。*」

しかし、こういう状況では、如何にミシェルが十六世紀人であったとしても、観察し思考し、しかもそれを書き記そうとしている人間として、どちゃどちゃと人だかりのする台所のテーブルにばかりしがみついているわけには行かないであろう。そこで、〈私は家にいるとき、かなり頻繁に書斎に身を避ける。〉ということにならざるをえないのであった。

ここに〈身を避ける。〉と訳したのは、ひょっとして訳し過ぎというものであったかもしれず、身をそらした、とか、寄り道をした、とでも訳した方がよかったかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けれども、御領主様が常に調理場の、大暖炉を前にした大テーブル――それは領主の事務机でもあった――についているのではなくて、たとえ不意に、ではなくても、〈かなり頻繁に〉その調理場からいなくなって、三層の塔にこもり、〈そこで時にはある書物を、時には別の書物を順序も目的もなくぱらぱらとめくる。またある時には夢想をし、またある時には歩きまわりながら、ここにあるようなとりとめもない夢を書きつづる。〉――こんなことのために、家族や差配役や召使、作男などから離れて行ってしまうことは、おそらくミシェル自身の妻や母からばかりではなく、領主一般としても好い評判を得ることは、むずかしかったであろう。

〈書斎（図書室とも訳せる）は塔の三階にある。一階は私の小礼拝堂で、二階は寝室とその次の間で、私はしばしばここでひとりになるために身を横にする。その上に大きな衣裳部屋がある。これは以前は、わが家のもっとも役に立たぬ部屋であった。私はそこで生涯の大部分の日々を、また、一日の大部分の時間を過す。夜分は決してここにはいない。それに続いて、かなり小粋（こいき）な小部屋があり、冬には火を入れることが出来、とても気持よく窓がうがたれている。（中略）すべて隠居場所には、散歩場が要る。私の思想は坐らせておくと眠る。私の精神は脚に揺り動かされないと進まない。書物なしで勉強する人は、みなこういうふうである。〉

彼は孤独を欲し、必要としている。

それは、十六世紀人としてはまことに例外中の例外であった。

〈書斎は円形をなし、私のテーブルと椅子のあるところだけが直線形をなしている。私の座からぐるりとまるくなっているから、私を囲んで五段に並んだ書物が一目で見渡せる。書斎からは三方に豊かな広々とした視野が開け、室内には直径十六歩の空間がある。冬にはあまり継続してはここにいない。というのは、私の邸は名前の通りに小山の上に建っていて、この部屋ほど風当りのひどい場所はないからである。そこまで行くのにいささか骨が折れることと、離れていることが私の気に入っている。運動になってよいし、みんなから逃げてもいられるからだ。ここが私の居場所である。私はここにおける私の支配を絶対のものにしようと努める。そしてこの一隅だけは、夫婦、親子、市民との共有から隔離しようと努める。ここ以外では、私の権威などは口先だけのものであり、その実力も疑わしいものにすぎない。〉

〈私の邸は名前の通りに小山の上に建っていて〉、と彼が書いているのは、モンテーニュという領主名が〈山〉を意味したからであった。現代語での〈山〉は montagne であるが、当時は montaigne と綴られていてモンターニュと発音されていた。それは山というには少々おこがましいほどの小さな丘であったけれども、それでも三キロほど南のドルドーニュの川岸、あるいは付近の谷間から見れば、山の上にそびえている、と見えるのであった。現在の城館は、後年に改築されたものであったが、ミシェルの書斎の塔と、もう一つの塔――それはマダムの塔とも呼ばれていた――は、当時のままで存している。

さてしかし、住居のことはともかくとしても、ここでもう一度繰り返しておかねばならないのは、彼が孤独を欲し、かつ必要としていることであった。それは人生態度としては、すでに農民

的なものではないであろう。とはいうものの、農民的なものでないならば、一足とびに都市的であるかといえば、そうでもないのであった。というのは、パリやボルドオなどの都市はたしかに、すでに成立してはいたのであったが、その都市なるものでの生活が、実はまだまだ農村生活の延長といったものであったからである。都市にあっても、まだ誰も個室などを欲しても必要だとも思っていなかった。

よかれあしかれ、ミシェルは十六世紀人といった枠組みから抜け出たものを内部に持っていた、ということになるであろう。

こういう特異な人物が出来(しゅったい)して来ることについて、もう少しこの十六世紀フランスの環境と生活形態に関して述べておくことが必要であろう。

都市が城壁で囲まれていたことは当然のことながら、少し詳しく眺めてみるとすれば、円筒形の塔が要所要所に配置されている。狙撃用の銃眼が壁にえぐられている。主たる城門の手前には跳ね橋があり、昼夜を問わず兵士が門をかためている。城壁の外には、ひょっとして大きな絞首台があり、そこに刑死人の屍がぶら下ってミイラ化しているかもしれない。その屍がその都市の正義を表象していた。

城門から市の内側へ入って、市内の道路事情については、前に触れたこともあったから（第一部）詳しくは記さないが、道路中央の凹みは下水であるからつねに悪臭が漂い、雨が降ればぬかるみ、日照りがつづけば埃だらけである。おまけに鶏や犬や家鴨や豚までが人間とともに通行する。

かくて市民の家の中に入ってみるとすれば、どの家も農村の民家と同じように、裏に庭、ある

いは菜園をもっている。屋根裏に乾草や麦藁、小麦、貯蔵食料などをたくわえている。パン焼き用の竈(かまど)があるかもしれず、葡萄酒の搾り機もあるであろうし、馬匹用の厩(うまや)と、牛や羊のための家畜小屋もがあるであろう。果樹園もあるかもしれない。

これではまだとても都市などとは言えないであろう。農村が都市のなかに押し寄せて来ていて、都市と農村とでは、さまで生活形態に変化はないのであった。人々の集合の度合いが農村よりいささか高い、といった程度の差であった。

違ったところは、これらの都市農家のような家の住人たちが、多く商人であり、武士であり、弁護士や代訴人などの、資格をもった人々であることであった。貴族も僧侶もまた、一つの資格であった。

都市に住むことに、さほどの魅力はなかったのである。

まだまだ田園の時代であった。

ところで、十六世紀にはまだこういう状態であったものが、次の世紀である十七世紀に入ると、革命的な変化が起り、王室と都市が、田園からむしり取ることが出来るもののすべてを掠め取るということが起るのであった。

しかしそれらのことはまだ先のことであり、その田園にあって、われわれの特異な人物が隠棲をすることになったのであったから、その周辺の様子を少し詳しく見ておきたい。というのも、これらの領主、あるいは地方貴族の城館というものが、大体において同じような構造をもっていたからである。

この時期の城館のきわだった特徴は、堡塁、あるいは防禦要塞的な性格が、次第に解除されて、外に向けて開かれたものに変化して来ていたことであった。城館をとりまいていた濠渠は埋められて、散歩用のテラスとなり、壁も低いものに替えられた。先に問題になっていた広い調理場の奥には、革をなめす道具が置かれ、中二階のようなところは酒蔵となっていて、葡萄酒や林檎酒が貯蔵されていた。この酒蔵とは別に、脂肉、塩肉、油や蠟燭、薪、冬期のための果実などを貯蔵する部屋を持つものもあった。ついでガラクタ置場と衣裳のための部屋があり、来客用の部屋がつづいていた。便所は外にあって、これは外壁にさしかけるように作られてあった。その方が衛生的ではあったろうが、冬期などにはさぞ辛かったことであろう。

主人である領主が邸にいるときに、大体において調理場にいたのは、少からぬ数の召使や使用人たちが、きちんと働いているかどうかを監視するためでもあった。ある記録によると、アンヌ・ド・モンモランシー元帥が、城館では調理場でではなく、自室で食事をとっていた、と驚きをもって書いていたから、他は推して知るべしといったものであったろう。

しかし調理場と一口に言えば簡単なことのようであったが、道具類もまた大変なものであった。食器戸棚があることは当然として、盥（たらい）、パン用の櫃（ひつ）、箱、鍋、鉄串、焼肉の道具、炙肉から滴（したた）る汁を受ける器、肉焼網、石臼、乳鉢、錫の鉢、皿、土器、陶器、薪架、自在鉤等々の道具も同居していたのであったから、如何にこの調理場が広くかつ天井も高かったとはいえ、ともかく大混雑であったろうと思われる。

そこに食事の時ではなくても、家族の全員と召使、二六時中出入りする使用人などがいたというのであるから、たとえば読書好きな少年などは、とてもいられたものではなかったであろう。

そこから考えても、幼い頃からラテン語での教育を受けていて、ラテン語をしか家では話さなかったというミシェル少年は、おそらくこの雑踏から隔離されて育てられていた筈である。

隔離とはいうものの、それは城館での一般的生活からの疎外でさえあったであろう。

同じく地階（日本でいう一階）の、その他の部屋をのぞいてみると、サロンと称された領主とその家族だけのための部屋があり、その他の部屋は、またまた武具や道具類で一杯である。

火縄銃、弾丸、火薬、槍、円盾（まるたて）、鉞（まさかり）つきの槍、鎖鎧（くさりよろい）、剣、弩（大弓）、矢筒（やづつ）、竿、棒のたぐい、投網、鳥網、魚用の曳き網、森の獣用の罠、猟嚢等々、これももう大混雑である。

それから井戸のある、広い中庭のどちらかの側には馬匹用の厩舎があり、それと並んで、牛、豚、鶏等の家畜のための小屋があり、鳩舎までがあった。（鳩は食用に供せられた。）その反対側には、パンだねをこねて、これを焼くための大きな竈があった。また収穫した葡萄を圧搾して葡萄液をしぼり出す、大きな圧搾機をしつらえたところもあった。

何分にも、すべて自給自足でなければならなかったから、道具類が矢鱈と必要なのであった。しかも必要なときにすぐに取り出せるように整理し、管理しておかなければならず、修理修繕もまた一仕事であった。

これらの道具その他を用いて、家事が整然と進行して行くために、果してどのくらいの人手を必要としたものであったろうか。二十人くらいの使用人で足りたものであろうか。

食事の内容についても、ほんの少しのことを書いておきたい。まずパンであるが、これも今日パンと称されているようなものではなかった。カンカチに固くて、そのままでは歯もたたないような代物であり、部厚く盛り上ったまるいパンであった。上等の小麦粉などは滅多に使われなか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com